

西行自歌合注釈(四)

武田元治

前稿で俊成判の『御裳濯河歌合』三十六番の注釈が終わったので、本稿では定家判の『宮河歌合』の注釈に入り、一番以下、二十番までをとり上げる。

『宮河歌合』

一番

左持

玉津島海人

一万代を山田のはらのあや杉に風しきたててこゑよばふなり

右

三輪山老翁

二流れいでてみ跡たれますみづがきは宮河よりやわたらひのしめ

左右歌、義隔^ニ凡俗、興入^ニ幽玄。聞^ニ杉上之風声、摸^ニ柿下之露詞、見^ニ宮河之流、探^深蒼海^深之底^探。短慮易^レ迷、浅才難^レ及者歎。仍先為^レ持。

【通釈】

一番

左持

玉津島海人

一 永遠の神の威徳を告げて、山田の原のあや杉に、風がしきりに吹きわたり、声をあげて呼び続けている。

右

三輪山老翁

二 遠い源から流れ出た水が、宮川となってここまで続くように、はるばる大日如来の示現されたみ社の垣は、この度会^{わたい}の神域^{しんぎ}の印^{しるし}であ

る。

左右の歌は、その心が世俗一般のものと異なり、感興が幽玄の域に及んでいる。(左の歌は)杉のこすえを渡る風の音を聞いて、柿本人麻呂の歌詞に見まがうばかりに詠み、(右の歌は)宮川の流れを見て、大海の底にも比すべき深い内容を歌っている。判者の浅い考えでは優劣の判断がつけられず、乏しい才能では理解の届きかねる作かと思う。そのため、一応持と判定しておく。

【注】○玉津島海人 この歌合で西行が仮に左歌の作者名としたもの。「玉津島」は、和歌浦の一部で、玉津島神社があり、その祭神に和歌の神とされる衣通姫が加えられていた。○山田のはら 伊勢神宮外宮のある地。○あや杉 綾杉。『拾遺集』に「平野の原のあや杉」を詠んだ歌(五九二)がある。サワラの変種で、葉は杉に似て裏は白い。西行は「聞かずともここをせにせん時鳥山田の原の杉のむら立ち」(『西行上人集』一四一等)とも詠んでいるから、ここも神域にふさわしい杉木立といったとらえ方が主となっているかと思う。○風しきたてて 風がしきりに吹きたてて、の意か。○三輪山老翁 この歌合で西行が仮に右歌の作者名としたもの。「三輪山」は大和にあり、山全体が大神神社の神体とされる。『古今集』の「わがいはは三輪の山もとこひしくはとぶらひきませ杉たてるかど」(九八二)は、よみ人しらずの歌であるが、三輪明神の作とする言い伝えがあった。(『奥義

抄』『古来風体抄』○流れいでて 源から流れ出て。ここでは、宮川の水が遠い水源から流れ出ていることを表すとともに、次の「み跡たれます」に続き、伊勢神宮の祭神が仏を根源としていることを言った表現であろう。○み跡たれます 仏が神として示現される。「跡」を「垂る」は、「垂跡」の訓読で、本地である仏・菩薩が衆生を救うために日本では神となって現われることを言う。伊勢神宮の祭神としての天照大神を大日如來の垂跡と見る見方は古くからある。ただ、伊勢神宮の内宮の祭神が天照大神であるのに対して、この歌に見える「宮河」付近の外宮の祭神は豊受大神であるが、内宮も外宮も大日如來の垂跡とする見方があった。『沙石集』(大神宮御事)には、「内宮外宮ハ兩部ノ大日トコソ習伝ヘテ侍ベレ」と言い、「内宮ハ胎藏ノ大日」「外宮ハ金剛界ノ大日」とする説を記す。○みづがき 瑞垣。神社の周囲に設けた垣根。ここでは「流れいでて」「宮河」に関連して「水」の意も含めた表現であろう。○宮河よりやわたらひのしめ 「宮河」(宮川)は、伊勢の国の南西部大台が原山に源を發し、東流して度会郡に入り、外宮付近を流れて伊勢湾に注ぐ川。「わたらひ」は、伊勢の国度会郡で、古来伊勢神宮の神領の地。「しめ」は、土地の領有を示す標識で、ここでは神の宿る地域の標識。この句は、源流に發した水が「宮河」を経て「わたらひ」の地に「わたる」(続き連なる)ことを一首の副想として表す一方、神宮の瑞垣は「わたらひ」の地の「しめ」(神域の標識)であることを一首の主想として言ったものとして解したい。○義隔「凡俗」 心が世俗一般と懸け離れていて。○興入「幽玄」 感興が幽玄の境地に達している。「幽玄」は、奥深さ、あるいは世俗から隔たる遠さを表す語。○摸「柿下之露詞」 柿本人麻呂の歌詞に見まがう優れた表現を示し。「柿下」は修辭上「杉上」に對置したもので、歌聖としての柿本人麻呂を言う。「露詞」は、「柿下」と言った縁で木の下の「露」を入れ、美しい言葉というほどの意に用いた造語か。○探「蒼海之底」 青海原の底にも比すべき深い内容をとらえている。なお、「探」は「深」とする本が多い。○仍 よりて。

【考察】この歌合で西行が一番に置いた二首は、神祇歌で、左は山田の原、右は宮川・度会を詠み入れており、ともに伊勢神宮、特に外宮の神への讚歌である。その点で『御裳濯河歌合』三十六番の二首が伊勢神宮の内宮の神への讚歌であったのを受け、それと対応する関係をもつと考えられる。

二首はいずれもこれ以前の歌集に見えない。西行晩年の作であろう。

左の歌は、外宮のあるあたり、山田の原の杉木立に吹きわたる風が、神の永遠の威徳を示して神々しい音を立て続けている、という情景であろうが、下句「風しきたてて声よばふなり」は、風の音に神秘的な靈力を感知した印象的な表現になっている。

右の歌は、「み跡たれます」の句の示すように本地垂跡の思想に基づき、伊勢神宮の神の源が大日如來にあることを言って、宮川のほとりの外宮の神域の尊嚴を歌ったと見られる。それで初句「流れいでて」は、宮川の水が遠い水源から流れ出ていることを言うとともに、伊勢の神が大日如來を根源としていることを言ったものである。この二つのことをない合わせた表現は一首全体にわたっており、それを歌の副想と主想とに分けて示せば、次のようになると思う。

(副想) ……遠い水源から流れ出た水が、宮川を経てこの度会の地に至っている。

(主想) ……はるばる大日如來の示現された神の社の垣は、度会の神域の印である。

この場合、副想は、主想の中心をなす度会の社の祭神の根源が遠くはるかなことを印象づけ、その神域の尊嚴を表す効果を高めていると思われる。

定家の判詞は、左右の歌を「義隔「凡俗」、興入「幽玄」と評し、持と判定している。こういう「幽玄」関係の評語は先人の用例を受けたもので、次のような先例が見られる。

興入「幽玄」(『古今集』真名序)

詞雖「凡流」、義入「幽玄」。(『和歌体十種』)

言凡流をへだてて、幽玄にいれり。(『奈良花林院歌合』基俊判詞)

風体は幽玄、詞義非「凡俗」。(『中宮亮重家朝臣家歌合』俊成判詞)

詞存「古風」、興入「幽玄」。(『三井寺新羅社歌合』俊成判詞)

これらの「幽玄」関係の評語は、先人の用例を後人がある程度継承して用いた形跡が見られると思う。そして当面の定家の評語の場合は、特に俊成の二つの用例の各の終わりの部分、「詞義非「凡俗」と「興入「幽玄」」を併せたような形の評語を用いている。それで定家は、判詞の文言の上で俊成の「幽玄」関係の評語を忠実に継承しているらしく思われる。

なお、その「幽玄」の内容も、定家は俊成から忠実に継承していたらしいことは、その評語を加えた歌から察せられる。この一番の二首の場合、左歌は、外宮のあたりの杉木立を吹く風が神の永遠の威徳を示して声をあげていると詠み、右歌は、源も遠く大日如来の示現した神の鎮座する所として度会の神域を歌っている。二首ともに俗界を離れた幽遠な神の世界を思う心のかかわれる歌であって、そういう点を定家は「義隔「凡俗」とも「興入「幽玄」とも評しているのである。このような幽遠な世界を志向する性質の見られる歌に対して「幽玄」と評することは、基俊や俊成の用例に見られる一つの傾向で、その伝統を定家が継承していると考えられる。

そしてこの「幽玄」の語を用いた定家の批評は、この場合の左右の歌の特色を適切に表していると思う。

二番 左

三 くる春は嶺に霞を先だててたにのかけひをつたふなりけり

右勝

四 わきてけふ相坂山のかすめるは立ちおくれたる春やこゆらん

左は、先立つ霞に谷の道の春をしり、右は、おくれたる春を関山

の霞にみる。詞はかはるに似て、心はずでに同じけれど、峰にかすみをとおきて、谷の懸樋をといへる、よき歌にもおほくよめる事には侍れど、此右歌は今すこしとどこほる所なくいひくだされ侍れば、まさるべくや。

【通釈】

二番 左

三 訪れる春は、峰に霞をまずなびかせて、谷間には懸樋伝いに流れ始める水に、姿を見せることだ。

右勝

四 とりわけ今日、逢坂山がかすんで見えるのは、遅れて来た春が、今山を越えているのであろうか。

左の歌は、春の先触れの峰の霞によって、谷の道にも訪れた春を知る心を詠み、右の歌は、遅れて来た春を逢坂山にかかる霞に見てとっている。左右で言葉は違っているようでも、基調とする心は元来同様であるけれど、(左の歌で)「峰に霞を」と言って、それに対して「谷の懸樋を」と言っているのは、よい歌にもそんな風に詠んだ例が多いには違いないのですが、一方の右の歌の方は、比べるとややのびやかに詠み下されておりますので、(右が)勝るであらうかと思えます。

【注】○相坂山 逢坂山。近江と山城の国境の山。今の滋賀県大津市と京都府の境に位置する。山の東側に逢坂の関が置かれた。○立ちおくれたる 来るが遅れた。「立ち」はここでは「春」「霞」の縁語。

○関山 逢坂山の異称。逢坂の関のある山の意味で言う。

【考察】二番の二首は、初春の歌で、共に春の訪れを知らせる霞を詠み入れている。

二首のうち左の歌は、『山家集』(九八五)では「題しらず」の歌の中に置かれているが、『西行上人集』(四)では「初春」と題する巻頭の十一首の中に見える。『山家心中集』(二三四)では雑の部に題詞なしに置かれている。右の歌は『山家集』(九)に次の詞書で見える。

春になりけるかたがへに、しがのさとへまかりける人にぐして
まかりけるに、あふさか山のかすみけるをみて

左の歌は、春は峰に霞をまずなびかせて、谷には氷が解けて流れ始
める懸樋の水に姿を現すと詠む。この発想の原型は、藤原長能の次の
歌などにあると言えるかもしれない。

谷川の氷もいまだきえあへぬに峰の霞はたなびきにけり(『後拾
遺集』一一)

右の歌も、春を擬人的に扱う点は左歌と同様であるが、逢坂山の霞
を見て、立ち遅れた春が今都の東の逢坂山を越えていることかと詠
む。「東風解凍」(『札記』)の語の示すような、春は東から来るとする
見方による点も含めて、発想は『後拾遺集』の橋俊綱の歌、

逢坂の関をや春もこえつらん音羽の山の今日はかすめる(四)
に通じるところがある。また「立ちおくれたる春」の語句は、『道命
阿闍梨集』の歌、

あらたまのとしはきのふにこえにしをたちおくれたる春がすみか
な(五一)

に霞と共に詠まれている。右歌はこれらの先行作から影響を受けた可
能性が考えられる。

定家の判詞は、山の霞に春の訪れを知る心を詠んでいる点で左右の
歌の心が共通することを言った上で、結局右歌の方が「今少しとどこ
ほる所なく」詠まれている点から右の勝とする。左歌で峰の霞と谷の
懸樋を対置した発想もさることながら、右歌が逢坂山の霞に焦点を絞
って、のびやかに詠んでいる点を、相対的に高く評価したのである
う。

三番 左勝

五若菜つむ野べの霞ぞあはれなるむかしを遠くへだつと思へば

右

六わかかなおふる春の野守に我成りてうきよを人につみしらせばや

右歌も、詞巧に心をかしくはみえ侍るを、末の句やなべての歌に
は猶如何にぞ聞ゆべからん。むかしをへだつるのべの霞は、あは
れなるかたも立ちまさり侍らむ。

【通釈】
三番 左勝

五若菜を摘む野べに、霞のかかるのを見ると、しみじみとした心にな
る、——若かった昔を、遠く隔てていると思うと。

右

六若菜の生える、春の野の番人にわたしはなつて、若菜を摘む人に、
憂き世で罪を重ねているのを知りたいと思う。

右の歌も、言葉が巧みな方で、心も面白いとは見えますが、
下の句は普通の歌としては、やはりいかなものかと思われま
す。(左の)昔を隔てる野べの霞を詠んだ歌の方が、あわれさの
感じられる点でも、まさっているでしょう。

【注】○若菜つむ「若菜」は、春先にもえ出る食用にする青菜の類。
若菜を摘むことは、正月七日ごろの野外の行事として行われた。○つ
みここでは、仏法に背く意味での「罪」に「摘み」を懸けた。

【考察】三番の二首は、初春の景物としての「若菜」に寄せて思いを
述べた歌である。

二首ともに『山家集』に見え、左歌(二二)は「わかかなよせてふ
るきをおもふと云ふ事を」、右歌(二三)は「寄若菜述懐と云ふ事を」
の詞書がある。なお右歌は『西行上人集』(二〇)にも「寄若菜述懐
を」、『山家心中集』(一六六)にも「わかかなよせて思ひをのぶとい
ふ事を」として出ている。

左の歌は、「若菜」に直接触れているのは初句だけで、二句以下に
詠まれた霞が一首の中心の題材のようにも見える。しかし、初春の行
事に「若菜つむ」ことを長年繰り返してきた身であればこそ、若かつ
た昔のことは霞の彼方になって感慨深いとする内容が生きているかと
思われる。

右の歌は、若菜の生える春の野の番人になるという上の句の内容から、憂き世で罪を重ねているのを人に知らせたいという下の句の内容へ、意外な展開を示す。そしてその橋渡しをしているのが、若菜摘みの「摘み」に「罪」を掛けた技巧である。

定家の判詞は、右歌については、技巧や趣向の面白さを認める一方、その下の句を問題視している。これは憂き世での罪を人に自覚させたいという仏教思想に基づく感想が、新春の若菜のもつイメージと結びつきにくい点を言ったのであろうか。それに対して左歌は「あはれなる」点でも勝るとしている。

四番 左持

セふる巢うとく谷の鶯なりはてばわれやかはりてなかとすらん

右

八色にしみかもなつかしき梅がえにをりしもあれや鶯（こゑ大成）のなく

右、対_二紅梅之濃香、感_三黃鶯之妙曲、左、聞_三新路之嬌音、譜_三旧巢之閑居。景氣雖_レ異、歌詞是均者歟。

【通釈】

四番 左持

セ谷のうぐいすが古巢を離れて（里に出て）しまえば、（残された）わたしが、うぐいすの鳴くの代わり、泣くことになるだろうか。

右

ハその色に心をひかれ、香りもゆかしい梅の枝に、折も折、うぐいすの来て鳴く声とする。

右の歌は、紅梅のこまやかな香りに接する折から、うぐいすの歌声を聞き感じ入る心を詠み、左の歌は、新しい道を求めるうぐいすの美しい声を聞き、その古巢の留守になるのを知ることを詠んでいる。（二首は）情景は異なるけれども、（うぐいすの声の美しさを詠んだ）歌詞の面では同様であると言えようか。

【注】○ふる巢うとく谷の鶯なりはてば うぐいすが（谷を出て）谷

の古巢と疎遠になってしまえば、の意。うぐいすが春に谷を出て鳴くことの典拠としては、『詩経』の「伐木」の詩なども挙げられるが、『古今集』の「うぐいすの谷よりいづる声なくは春くることをたれかしらまし」（一四、大江千里）の歌などがよく知られた。○われやかはりてなかとすらん わたしが、うぐいすのなくの代わって、（寂しさのために）泣くことになるだろうか。○黄鶯 うぐいす。○聞_三新路之嬌音、譜_三旧巢之閑居 「新路」のことと「旧巢」のことを対置したのは、『和漢朗詠集』「鶯」に、「新路如今穿_二宿雪_一、旧巢為_レ後_一、春雲」（七〇、菅三品、原詩は『菅家文章』四五三）とあるのによったのであろう。「嬌音」は、美しく優しい声。「譜」は、ここでは「しる」。 「閑居」は、静かな住居で、うぐいすが巢を留守にした状態を言った。○景氣 ここでは、情景。

【考察】四番の二首は、鶯を詠んだ歌である。

二首のうち左の歌は、『山家集』（二七）に「住みける谷に、うぐいすのこゑせずなりければ」として出ている。『山家心中集』（一六七）には「住み侍し谷に、うぐいすのこゑせずなりしかば、なにとなくあはれにおぼえて」として出ている。右の歌は、これ以前の歌集に見えない。

左の歌は、うぐいすが谷の古巢を出てしまえば、残された自分は孤独に耐えかね、うぐいすの鳴く（泣く）のに代わって泣くことになるうか、と詠む。うぐいすの「鳴く」のに「泣く」を掛けた技巧を用いているが、こういう技巧は早く『古今集』物名の歌でも、「うぐいす」を題とした作、

心から花のしづくにそほちつつ憂く干ずとのみ鳥のなくらむ（四二二、藤原敏行）

に用いられている。西行は『山家集』でこの左歌の前に置かれた「雨中鶯」の題の歌にも、

鶯のはるさめざめとなきゐたる竹のしづくやなみだなるらん（二六）

と詠んでいる。

右の歌は、梅に鶯を配合した作であるが、両者を配合することは『万葉集』以来その例が多い。ただこの歌は梅の色と香に鶯の声を加え、視覚、臭覚、聴覚の美をそろえた点に特色を出したと言えるかもしれない。

定家の判詞は漢文を用い、「注」に記したように道真の詩句をとり入れて文章を飾ったりもしている。あるいはこれは、左右の歌をやや伝統的な優美な詠風に傾くと見て、多少形式的な評語で応じたところがあるかとも思うが、思い過ぎであろうか。

五番 左持

九雲にまがふ花のさかりをおもはせてかつがつかすむみよしの山

右

一〇 ふかく入ると花のさきなむをりこそあれとも尋ねん山人もがな
左右の歌、心詞誠にをかくも侍るかな。花より前に花を思へる心もおなじさまなるを、右の末の句は猶えんに聞え侍れど、芳野山の春の気色も猶劣ると申しがたし。

【通釈】

五番 左持

九雲かと見まがう花の盛りを思わせて、早くもかすみ初めて見える吉野の山よ。

右

一〇 山深く入ろうとして、これから花の咲こうとする折も折、共に花を尋ねるような山人がいてほしいと思う。

左右の歌は、心も言葉も実に興趣に富むものと思えます。花の咲くより前に花を思った心も同様ですが、右の歌の下の句は一段と優美に思われますけれど、(左の歌に詠まれた)吉野山の春の様子も、やはり劣るとは言えないように思います。

【注】〇かつがつかすも。〇ふかく入ると 山に深く入ろうとして。

〇をりこそあれ ちょうどその折。折も折。〇山人 山に住む人。

【考察】五番の二首は、花の歌で、花の咲く前に花を思う心を詠んだ点で共通する。なお花の歌の組み合わせは、以下十番まで続く。

二首のうち左の歌は、『西行上人集』(二四)に「霞」の題で、『聞書集』(五一)に「漸待花」の題で出ている。右の歌は、これ以前の歌集に見えない。

左の歌は、吉野山の花を「雲にまがふ」ものとして歌い出しているが、こういうとらえ方は、『後撰集』の

み吉野のよしの山の桜花白雲とのみ見えまがひつつ(一一七、よみ人しらす)

などの歌にすでに見えるところである。しかし一首の眼目はそこにあるのではなく、その遠く咲き満ちて連なる花の雲を思わせて、早くも吉野山に霞がかかっていると詠み、花を待つ西行の心をおのずと伝えている点に特長をもつ歌であろう。

右の歌は、俗塵を避けて山深く入ろうとしながら、やがて咲く花を思い、その花を共に尋ねる山人がいてほしいと願っている。これも西行の生き方を基本的に特徴づける心がそのまま集約されたような一首であろう。

定家の判詞は、左右の歌に「花より前に花を思へる心」が同様に認められることを言っており、そういう心が自然に生き生きと表現されているところから、二首ともに「心詞誠にをかくも侍るかな」と評したのであると思う。

六番 左持

二 年をへてまつもをしむも山ざくら花心を春は(山家集)に心をつくすなりけり

右

二三 花をまつ心こそ猶あはれむかしなれ春にはうとく成りにしものを
春にはうとくなど、哀あはれにはきこえ侍れど、左も花を思へる心ぶかく、詞やすらかにいひくだされて侍れば、又おなじ程の事にや。

【通釈】

六番 左持

二 年々歳々、待つのも惜しむのも、まず山桜で、花春は山家集に思いの限りを
尽くすことだ。

右

三 花を待つ心は、今もやはり昔と変わらない、——（出家して）春
には縁遠くなったわたしだというのに。

（右の歌に）「春にはうとく」なったなどと詠んでいるのは、哀
れには思われますが、左の歌も花を思っている心が深く、それを
安らかな言葉で詠みくだされていきますので、これも同等の歌の組
み合わせかと思えます。

【注】○山ざくら 山にある桜。家桜に対して言う。○むかしなれ
昔どおりだ。この意味の用例は、『古今集』の「いそのかみ古きみや
この郭公こゑばかりこそ昔なりけれ」（一四四、素性）がある。

【考察】六番の二首も、花の歌である。花を思う心を詠んでいる点は
前の五番の二首と同様であるが、この場合は長年にわたる自身の花を
思う心を願みて詠んでいる点に特色が見られる。

二首のうち左の歌は、『山家集』（一〇九）に、第四句「心を春は」
の形で、「落花の歌あまたよみけるに」の詞書をもつ歌群の一首とし
て出ている。『西行上人集』（六一四）には「題不知」として見え
る。『続拾遺集』（九一）でも「題しらず」である。右の歌は、『西行
上人集』（四四）に、「花」と題する歌群の一首として見える。

左の歌は、長年にわたり山桜の花を待ち、散るのを惜しみ、花に思
いをさまざまに尽くしてきたことを回顧しての感慨を詠んでいる。素
直で自然な詠み方で、西行の感慨がおのずと伝わってくる一首であ
らう。

右の歌は、出家した自分は一般の人々と違って春への関心など薄い
はずなのに、花を待つ心だけは昔と少しも変わらないという感慨を詠
んだと思われる。このような西行の気持ちは、

花にそむ心のいかで残りけむ捨てはててきと思ふ我が身に（『山
家集』七六、『西行上人集』五三、『御裳濯河歌合』八番左）

の歌の場合などとも共通していると思う。なお、山田昭全氏はこうい
う解釈をとらず、「桜を待ったのは昔のこと、老境の今はもう迎春
の興味を失ってしまった」（『西行の和歌と仏教』）という解釈を示さ
れているが、いかがであろう。

定家の判詞に、右歌について「春にはうとくなど、哀にはきこえ」
ると評しているのは、やはり西行が出家して春を楽しむことと縁遠く
なった身の上を願みて、花を待つ心だけは昔と変わらないと詠んだ点
を、哀れに思われると言っていると思う。一方、これに対する左歌も
「花を思へる心ふかく」、またその心を「詞やすらかに」詠んでいる
として、左右の歌を同等と判定したと見られる。

ちなみに「心ふかし」は、俊成の復活した評語であるが、その用例
が、西行の歌を番えた『御裳濯河歌合』の俊成の判詞で特に増加して
いる。『宮河歌合』の定家の判詞では、用例数はさして多くないが、
題材について作者の思い入れの深さが認められる場合にこの語を用
い、俊成の見方を継承しているようである。

【備考】六番左歌は『続拾遺集』（九一）に、右歌は『玉葉集』（一八
六八）に収められている。

七番 左

三 山桜かしらのはなに折りそへてかぎりの春の家づとにせん

二四 花花よりは大成よりも命をぞ猶をしむべきまちつくべしとおもひやはせし

左の、かぎりの春のといひ、右の、いのちをぞ猶といへる、いづ
れもあはれ深くは待るを、かかし頭の花にとおける、此歌にとりてはさ
こそはとみゆれど、霜雪霜雪などは大成などはつねに聞きなれたる事なるを、花
といへるもある事にはあれど、いかがと聞え待るにや。大かたは
歌合のためによみ集められたる歌には侍らねば、かやうの事しひ

て申すべきにはあらねど、右の歌耳にたつ所なきに付き、勝かつとと申すべし。

【通釈】

七番 左

二三 山桜の花を折り、白髪しらがの花に加えて、人生の最後の春の、家への土産としよう。

右勝

二四 花を惜しむよりも、自分の命の方を惜しむべきだ、——今年の花の春も待つて遭えるとは思わなかった。(遭えたのも命があったからだ。)

左の歌に「かぎりの春の」と詠み、右の歌に「命をぞ猶」と詠んでいるのは、どちらも哀れ深いと思います。ただ(左の歌で)「頭かしらの花に」と言ったのは、この歌に即して見ると、なるほどと思われるけれど、「頭かしらの霜」「頭かしらの雪」などの言い方は平素聞きなれていることだが、「頭かしらの花」と言うのは、そんな風に詠んでいる前例もあるには違いありません。どうかと思われるのです。(ここに挙げられた歌は)一般に本来歌合のために詠まれて集められた歌ではないのですから、このような点をあえてとかく申すべきではないけれど、右の歌はその点別に気になるところがないので、右の勝と判定しましょう。

【注】○かしらのはな このままの形では過去に例を見いだしにくい語であるが、「かざしの花」と同様の意味で、髪にさす花を言ったとも見られる。しかし定家の判詞に挙げられた「かしらの霜」「かしらの雪」などと同類の言い方とすると、白髪を花に例えた語である。その方が作意に近いと思われる点は「考察」で触れる。○かぎりの春 人生の最後の春。○家づと 家への土産。○まちつく 待つて遭う。○さこそは さぞかし(そうであらう)。○耳にたつ 聞いて心にとまる。ここでは、気に掛かって心にとまる意。

【考察】七番の二首も花の歌である。そして特に老人の花を愛する心

を詠んだ点に共通性が見られそうである。

二首とも『聞書集』に見え、左の歌(五八)は「老人翫花」の題があり、右の歌(二三)は「花の歌十首人々よみけるに」の詞書をもつ歌の中の一詩(ただし初句「花よりは」)である。なお、左の歌は『西行上人集』(六八二)にも見えるが、題詞等はない。

左の歌は、「山桜の花をかざし」として、人生最後の春の家づとにしよう」との大意であらう。「老人翫花」の題の歌で、西行の体験を直接詠んだものではないが、老人の花にひかれる心が流露していると思う。ただ「かしらの花」は先例の見いだしにくい語であるところから、定家の判詞で問題視されている。

右の歌は、花を命に代えて惜しむという考えがあることを前提にして、「やはり花よりも命を惜しむべきだ、というの、思いがけず今年の花の春に遭えたが、これも命があったからだ」とする考えによっていると思う。こういう花と命のとらえ方は、藤原長能の、

身にかへてあやなく花を惜しむかな生けらばのちの春もこそあれ
〔拾遺集〕五四

の歌の場合などにも見られるであらう。ただ、この種の内容の歌は一般に理知的な判断が表に出、理屈が目立つ傾きがあるが、西行の右歌はその弊があまり感じられないようで、これは主に下句「待ちつくべしと思ひやはせし」が切実な感慨を歌っているためかと思う。もっとも、その下句と上句との内容の関連が直接的でないことが、一首をやや分かりにくくしていると言えるかもしれない。

定家の判詞は、左右の歌がいずれも余命を意識して詠まれている点について「あはれ深く」思われると言った上で、左歌の「かしらの花」の語を問題にしている。「かしらの花」は、「注」でも触れたが過去に用例の乏しい語であるが、もし西行がこの語を「かざしの花」(『枕草子』とか『榮花物語』巻四十に挙げる源頼綱の歌とかに用例がある)などと同様の意味で用いたとすれば、髪にさす花のことで、一首の初句二句は「山桜をかざしの花として」の意と見られ、それで

歌意は十分に通じると思う。けれども、定家の判詞に挙げる「かしの霜」や「かしの雪」と同類の語として用いたとすれば、白髪を花に例えて言ったと見られる。白髪を花に例えるのは不似合いなようにも思われるが、早く『千里集』に、

くろかみのはかに白くなりぬれば春の花とぞ見えわたりける

(一一四、「素髪俄仮変春花」)

と詠まれていることである。そして西行がこの千里の作に基づいて詠んだと思われる歌が、『聞書集』で「かしの花」の歌の後に出てくる。それは「老人見花」の題のある次の歌である。

ながむながむちりなむことを君もおもへくろかみ山に花さきにけり(五九)

この下句で黒髪山に花が咲いたと歌うのは、千里の作によって、黒髪が白髪になった意を託したものであろう。そんな点を参照すると、西行の「かしの花」は白髪を示すと見るのがやはり作意に近いと思われる。定家は、この言葉をも十分に完成された表現とは認めず、そのために左歌は負になっている。

八番 左

一五 を生まれぬ身だにも世には有るものをあなあやにくの花の心や

右勝

一六 うき世にはとどめおかじと春風のちらすは花を思ふなりけり(大盛)

右、花を思へるあまりにちらす風をうらみぬ心、まことにふかく侍るうへに、左、あなあやにくのとおける、人つねによむ事には侍れど、わざとえんなる詞にはあらぬにや。ちらすは花をなどいへるは、猶まさり侍らむ。

【通釈】

八番 左

一五 惜しまれぬ身が身さえ、この世に永らえているのに、(惜しまれながら) 散り急ぐとは、なんと意地悪な花の心だろう。

右勝

一六 この憂き世には留めておくまいと、春風が花を散らすのは、花を惜しんでのことなのだ。

右の歌は、花を愛するあまり花を散らす風と見て、風を恨まない心で、これはまことに思い入れが深いと見えますが、一方左の歌で、「あなあやにくの」と詠んでいるのは、人がよく詠むことではあります、あまり優雅な言葉ではないように思うのです。(それで右の歌に)「散らすは花を」(惜しんでのこと)などと詠んでいる方が、やはりまさっているでしょう。

【注】○を生まれぬ身 惜しまれぬ身、の意か。世を去っても惜しまれぬ身、の意とも見られる。○あやにくの 意地のわるい。○花を思ふ 「思ふ」は、『平安朝歌合大成』では「をしむ」。『山家集』『西行上人集』『山家心中集』等でも「をしむ」(「おしむ」)の形が一般的である。○うらみぬ心 恨まない心。「うらみ」は上二段活用の動詞「うらむ」の未然形。

【考察】八番の二首も花の歌であるが、落花について、花を惜しむ心を主な内容とする。

二首とも『山家集』の「落花の歌あまたよみけるに」の詞書をもつ歌群の中に、左歌(一一六)右歌(一一七)の順に並んで出ている。『西行上人集』(一〇三、一〇四)や『山家心中集』(二八、二九)にも並んで出ている。なお右歌は『玉葉集』(二二二)にも「花を」として収められている。(ただ右歌第五句は、どの歌集も「をしむなりけり」が一般的である。)

左の歌は、下句に花を擬人化して、人が惜しむのに散るとは「あなあやにくの花の心や」と詠む。このように散り急ぐ花の心をとがめる発想は、『後撰集』に収める貫之の歌、

風をだに待たてぞ花のちりなまし心づからうつろふがうさ(八八)

の下句などにも見られる。しかし、上句に「惜しまれぬ身」でも世に

あることを言い、それと対照的に下句で惜しまれる花が散ることを詠んだ点は、この左歌の特色であろう。

右の歌は、春風を擬人化して、春風が花を惜しみ、花を憂き世には留めておくまいとして散らすと詠む。花を散らす風を恨む歌は多いけれども、このように風の立場に立ち、風を恨まない内容の歌は類が少ないであろう。

定家の判詞は、まず常識的な見方によらないその右歌の心を、思い入れの深いものとして高く評価する。次に左歌に用いられた「あなあやにくの」という言葉を、人がよく使う言葉ではあるが、「わざと艶なる詞にはあらぬにや」と批判する。「あなあやにくの」という言葉は、例えば『後拾遺集』の歌、

いかにせんあなあやにくの春の日やよはのけしきのかからまし
かば(六八三)

などの用例があるけれど、その意味の上からも優雅な歌語とは見られなかったであろうと思われる。特にこの左歌のような花の歌で、「花の心」をあしざまに言うのは、花の本意に背くと見られた点もあったかと思う。

【備考】八番右歌は『玉葉集』(二三三)に収められている。

九番 左勝

一七 世の中を思へばなべてちる花の我が身をさてもいかにせむ(大成)

右

一八 花さへに世をうき草になりけりちるををしめばさそふ山水

右歌、心詞にあらはれて、すがたもいとをかしう(大成)すがたもをかしうみえ侍れば、山水の

花の色、心もさそはれ侍れど、左歌、世の中を思へばなべてといへるより、をはりの句の末まで、句ごとにおもひ入れて、作者の心ふかくなやませる所侍れば、いかに勝侍らん。

【通釈】

九番 左勝

一七 世の中を思うと、すべて(物事は)散る花のようにはかないのだが、そのはかないわが身を、さてまあ、どへやればよいのだらうか(大成)どうすればよいのだらうか。

右

一八 花までも、この世を憂いものと思うのか、散って水に浮かび、浮き草のようになってしまった。散るのを惜しんでいると、山川の水が花を誘って(花は流れ去って)いく。

右の歌は、心が言葉によく表現されていて、歌の姿も興趣のあるものと思われますので、山水の誘う花の美しさに、つい心を誘われるのですが、左の歌は、「世の中を思へばなべて」と詠んだ冒頭から、終わりの句の末尾まで、一句一句に思い入れて、作者の心を深く悩まして詠んでいるところがありますので、どうしてもこれは勝つべき作でしょう。

【注】○いかにせむ どのようにしようか。ただし『平安朝歌合大成』では「いづちかもせむ」で、『西行上人集』『新古今集』等でもその形が一般的である。その場合は、どこへやればよいのだろうか、の意。○世をうき草になりけり 「うき」は「憂き」と「浮き」の懸詞で、世を憂いものと思う心と、浮き草になった意とを表す。花が浮き草になるとは、花びらが水面に散り敷いて浮き草のように見える状態になることであろう。

【考察】九番の二首も花の歌、落花の歌であるが、花に寄せた述懐の歌とも言える。

二首とも『西行上人集』の「花」の歌群の中に、左歌(一〇五)右歌(一〇六)の順に並んで出ている。ただし左歌は第五句「いづちかもせむ」の形で、この点は『新古今集』(二四七一、題しらず)でも同様である。右歌は『聞書集』(六四)では「寄花述懐」として出ている。

左の歌は、世の中を思うと、散る花のようにはかない「我が身」をどう扱っていけばよいのか、との大意で、人生の無常を嘆くと共に、

自己を凝視し生き方に深く悩む者の思いを伝えているようである。

右の歌は、掛詞になっている「世をうき草」や、「さそふ山水」などの言葉から、次の小野小町の歌を本歌とした作と思われる。

わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思

ふ（『古今集』九三八）

この本歌に見られる世の中に生きる身を嘆く心は、右歌にもうかがわれるが、右歌では、散って水に漂う花を中心に据え、山水が花を誘い花が水に誘われて流れ去る、花のうつろいゆく姿の美しさを印象づける詠み方をしているところに特長がありそうである。

定家の判詞は、「をかしう」見えるとし、山水の誘う花の美しさに心ひかれると言っているが、左歌の「句ごとに思ひ入れて、作者の心ふかく悩ませる所」がある点をより高く評価して、左の勝としている。この定家の批評を、西行は大層喜んで受けとったように、これは西行の「贈定家卿文」の文面の示すところである。

【参考】○「贈定家卿文」について

「贈定家卿文」は、西行の定家にあてた書簡で、『宮河歌合』の定家の判詞に対する西行の見解が見られる。西行がこれを書いた時期は、萩谷朴氏が「定家判詞の草稿を校閲して返送する時のものであるから、文治五年の秋にもなった」（『平安朝歌合大成』）ころと言われるとおりであろう。

これは西行の歌を対象とした定家の判詞に対する西行の見解が知られる点で注目されると思う。ここでは歌合九番の定家判詞に対する西行の見解の見られるところを、(1)左歌への判詞に関する部分と、(2)右歌への判詞に関する部分の要所とに分けて挙げ、通釈を添える。通釈はすでに萩谷朴氏が『平安朝歌合大成』で示されているが、今は久保田淳氏編『西行全集』所収の扶桑捨棄集本によって私解を記す。（本文の表記は、現代一般の表記に従って一部変更したところがある。）

(1) この御判の中にとりて、九番の左の、わが身をさてもといふ歌の

判の御詞に、作者のころろふかくなやませる所侍ればとかかれ候、かへすがへすおもしろく候物かな。なやませると申御こと葉に、万みなこもりて、めでたくおぼえ候。これあたらしくいでき候ぬる判の御こと葉にてこそさふらふらめ。古はいと覚候はねば、歌のすがたに似て、いひくだされたるやうに覚候。一々に申上て、見参にうけたまはらまほしく候物かな。御感もかうぶりさふらひかした、あらましごとにおもひつづけられ候事ども、あまた処候。若命いきて候はば、かならずわざといそぎまいり候べし。

〔通釈〕

この御判の中でも、九番の左の、「わが身をさても」という歌に関する御判のお言葉に、「作者の心ふかくなやませる所侍れば」と書かれていますのは、まことに興味深いお言葉と存じます。「なやませる」というお言葉に、（作者の心の）すべてが皆言い尽くされて、結構に思われます。これは新しく生まれました判のお言葉なのでしょう。この評語を昔用いた例は全く心に浮かびませんから、歌の姿に対応して、おのずと記されたもののように思われます。（こんなことを）一つ一つ申し上げて、拝顔の折にお考えを承りたいものと存じます。（伊勢の）神の御賞美もぜひお受けいただきたい、今後に予期されて参りますことが、沢山ございます。もし私の命がありましたら、必ず心がけて急いで参上致そうと存じます。

(2) さて又、右の歌の、春をおしめばさそふ山水と候、春のもじ妙に聞候。たけたかくなり、ころろもこもり、おもしろくもおぼえ候。散をおしめばよりは、春をおしめばと、少もおもひよらず候ける、面白覚え候。思出をもし過たるこそよく候へ、是はおもひ候はざりし。心のこもるさま、猶々おもしろく候。又かくおほせてたびて候うれしき、伊勢の御神御らんじ候らん、はいある様におぼえ候。はじめたるやうにて、よかれあしかれ判のことばは書候に、なをなをうれしく候。

かく申置候て後、又今ひとときは更に、唯今思事候。ただ、ちるをおしめばさそふ山水にて候べきやらんとおぼえ候。一には歌がらの、花さへになど申はじめてつづけて候、体の軽きおもむきのすぢに候。(下略)

【通釈】

ところで一方、右の歌(の「散るを惜しめばさそふ山水」)について、「春を惜しめばさそふ山水」という形を示されましたが、なるほど「春」の言葉は実にすばらしいと思われます。「散る」を「春」に改めると、歌の格調も高くなり、心も深まり、新鮮な興味も感じられます。「散るを惜しめば」よりも「春を惜しめば」がよいとは、全く思い寄りませんでした。興味深く思われます。思出にしても事実を超えて思い浮かべたのがよいものですけれど、これは思い付きませんでした。「春」とすると、心の深まる趣が、一層面白く思われてきます。また、このように御指摘をいただきましたらうれしさは、伊勢の神も御照覧のことでしょうが、私の期待がかなえられたように思われます。(判詞の執筆は)初めての御経験のようで、よしあしに構わず判詞を記してありますので、ひとしおうれしく存じます。

以上のように申しました後に、さらにまた改めて、ただ今思いついたことがあります。やはり(この歌は)「散るを惜しめばさそふ山水」の形でよいのではないかという気がするのです。それは一つには歌柄が、「花さへに」などと歌い始めて以下の言葉を統括して、その歌の姿が軽い様子運び方をとっているからです。

(下略)

西行は、九番左歌への定家の判詞については、「作者の心ふかくなやませる所侍れば」という批評を引用し、一首に適切に対応した新しい評語を用いたとして大層喜んでゐる。評語として「心ふかく」は従来用いられるが、「心ふかくなやませる」とまで言って、生き方に悩

む作者の思いに迫った点を喜んだのであろう。

右歌への定家の判詞については、現在の判詞には見られないが判詞草稿に「散る」を「春」に改めることの提案があったらしく、西行はまずその提案を喜んで肯定する態度をとった上で、再考すると改めたい方が歌柄にふさわしいと思う旨を、穏やかに述べている。

西行は当時河内の弘川寺で最後の病床に就いていたが、若い定家の資質を信頼し、その批評を喜ぶと共に、自分の意見は率直に言い添えたところが見られる。

【備考】九番左歌は『新古今集』(二四七一)に収められている。

十番 左

一九 かざごしの峰のつづきにさく花はいつさかりともなくや散るらん

右勝

二〇 風もよし花をもさそへいかげん思ひはつればあらまうき世ぞ

左、よのつねのうるはしき歌のさまなれど、右、風もよしとおけるより、終句のすままで、詞心(詞心)たくみに、人及びがたきさまなれば、勝と申すべし。

【通釈】

十番 左

一九 (風の吹き越す) 風越山(かぜこし)の、峰(かみ)続(つ)きに咲く花は、いつが盛りという(う)こともなく、散(ち)っていることであらうか。

右勝

二〇 風が吹くのも結構、花を誘うなら誘え、仕方のないことだ、—— 思い切ってしまうと、生きていたくない世の中である。

左の歌は、普通の整った歌の姿であるが、右の歌は、「風もよし」と詠んだ初めの句から、終わりの句の末尾まで、言葉も心も巧みな詠み方で、他人の及びがたい歌の姿であるから、勝と判定しよう。

【注】○かざごしの峰 信濃の国の歌枕。今の長野県南部、飯田市の

西にある風越山。その名の示すように風の吹き越す山として詠んでいる。○あらまうき世 生きていたくない世。「まうき」は、助動詞「まうし」の連体形で、「まうし」は「まく憂し」に基づくかと思られる点は、「まほし」が「まく欲し」に基づくかと思られる。ただし「まうし」「まく憂し」の用例は残っていないので、「まほし」の成立後にその類推によって生じた語と考えられている。「まほし」の反対語として、平安中期から鎌倉時代にかけて用いられた。

【考察】十番の二首も花の歌で、落花に関する歌である。九番の二首と異なるのは、花を散らす風を詠み入れている点である。

二首のうち左の歌は、『山家集』(八三)に、「花の歌あまたよみけるに」の詞書をもつ歌群の一首として出ている。『西行上人集』(七九)には「花」と題する歌群の中に見える。なお『山家心中集』(一五)にも見える。右の歌は、『西行上人集』(一〇七)に、「花」と題する歌群の一首として出ている。

左の歌は、「風越の峰」を名前どおり風の吹き越す山としてとり上げ、花は風のために盛りを迎えず散っていることであろうと詠む。

右の歌は、風の散らす花に関する述懐で、三句までは句ごとに内容に応じた形で言い切り、変化ある調べで無常の世に生きる嘆きを歌う。

定家の判詞は、左歌を「よのつねのうるはしき歌のさま」、普通の整った歌の姿と評し、それに比べて右歌を「詞心たくみに、人及びがたきさま」と評する。右歌が独自の抑揚をもった言葉運びで心の動きを新鮮に伝えた点を巧みと見て高く評価したのであろう。

十一番 左勝

二 かぞへねど今夜の月のけしきにて秋の半を空にしるかな

右

三 月のすむあさぢにすだく 菘露のおくにやよるをしるらん

仲秋三五天、歌のすがたたかく、こと葉清くして、二千里の外も

まことにのこるくまなからんと思ひやられて侍れば、あさぢがしたのむしの音、月の光はおなじくひるにまがふとも、露の詞は猶難し及空哉。

【通釈】

十一番 左勝

二 (今日は幾日と) 数えてはみないが、今夜の空に仰ぎ見る月の様子で、中秋、八月十五夜と推し測られる。

右

三 月の光の(昼のように)明るく澄む浅茅に、集まって鳴くこおろぎは、夜露の置くことで夜の訪れを知るのであろうか。

八月十五夜の空を詠んだ(左の)歌は、歌の姿が格調が高く、言葉が清らかで、(澄んだ月の光に)二千里のかなたまで本当に残る陰もなく明るいことであろうと思いやられますので、浅茅の下の虫の音を詠んだ(右の)歌は、月の光は(左の歌と)同様に昼と区別のつかないほど明るい様子をとりあげていても、地上の露を詠んだ(右の)歌は、やはり月のある空を詠んだ(左の)歌に及びがたいかと思うのです。

【注】○秋の半 秋のなかば。中秋。八月十五日。○空にしる 空を見て知ることと、心で推し測って知ることを懸けた表現であろう。

○あさぢ 浅茅。丈の低いチガヤ。また、まばらに生えているチガヤ。チガヤは野原などに群生するイネ科の多年草。○すだく 本来は多くのものが群がり集まる意であるが、虫などが集まって鳴く意味にも用いられた。○三五天 十五夜の空。○二千里の外 二千里のかなた。○三五夜中新月色、二千里外故人心(『白氏文集』)による。

【考察】十一番の二首は月の歌である。この月の歌の組み合わせは、以下十六番まで続く。

二 一首ともに『山家集』に見え、左歌(三三〇)は「八月十五夜」と題する七首中の一首、右歌(三九三)は「月前虫」と題する二首中の一首である。なお左歌は『西行上人集』(二〇三)にも「八月十五夜

を、「山家心中集」(三七)にも「八月十五夜」として出ている。

左の歌は、『山家集』で前に置かれた歌、

山のはをいづるよひよりしるきかなこよひしらする秋のよの月

(三一九)

と内容上関連があり、山中に隠棲する身として、月を仰いで直ちに中秋と知る心を詠んだ作であろう。これと似た歌に、登蓮の、

かぞへねど秋のなかばぞ知られける今夜に似たる月しなれば

【治承三十六人歌合】三二〇、『新勅撰集』二六〇】

がある。二首は語句や発想がよく似ているが、比較して見ると、登蓮の歌が三句で切れ、下句がやや説明的とも思われるのに対して、西行の歌は率直に一息に詠み下し、張りつめた調子が感じられるのではなからうか。

右の歌は、月が余りに明るい「きりぎりす」が夜も昼と区別しにくからうと考えて、夜露の置くことで夜の訪れを知るのであらうと歌う。左歌に比べて趣向を立てて詠んだところがある。

定家の判詞は、左歌が中秋の名月のあまねく照らす様子を思わせることを言って、「歌のすがたたかく、こと葉清くして」と評し、対する右歌が浅茅の下のきりぎりすに視点を置いて月の明るさを詠んだ趣向は認めながらも、左歌には及びがたいと判定している。月の明るさをまともに詠んだ左歌の方が、それを浅茅にすだく虫の心からとらえようと趣向を立てた右歌よりも、歌柄が高いと評価したようである。

十二番 左

三三 清見がたおきの岩こす白波に光をかはす秋のよの月

右勝

二四 月すみて深くる千鳥のこゑすなり心くたくや須まの関守

清見潟、須磨関、名所のさま、左まさる、右おとるとはまことに申しがたく侍れど、すがたにつきては、猶いはこす波により、心を思へば、又夜ぶかき関にとまりぬべく侍るを、崇徳院御製の中

に、浦わの風に空晴れてと侍るは、ちかき世の事なれど、玉のこゑ久しくとどまりて、今はむかしといふばかりに時代へたりて侍りにければ、猶右勝とや申すべからん。

【通釈】

十二番 左

三三 清見潟の、沖の岩を越す白波と、光をさし交わすと見える秋の夜の月よ。

右勝

二四 月が澄んで、夜が更けるうちに、千鳥の声がする。その声に(目覚めて)いろいろなもの思いをする須磨の関守よ。

右の歌の優劣はまことに判定しにくいのですが、歌の姿については、やはり(左の)岩を越す波の歌に気持ち傾き、歌の心を思うと、また(右の)夜更けの関の歌に心が引かれてしまっています。ただ、崇徳院のお作りになった歌の中に、「玉よする浦わの風に空晴れて光をかはす秋の夜の月」と詠まれていますのは、近い世の作ながら、院の秀吟として長く人々の心に残って、今は昔と言

う程に時代が離れた古典的名歌のようになってしまっており、(これと同じ下句の左歌はいかがかという観点に立つと)、やはり右の歌の勝と判定すべきかと思えます。

【注】○清見がた 今の静岡県清水市興津、清見寺付近の海岸。○須まの関 今の神戸市須磨区、六甲山地が海に迫るあたりに、古く撰津と播磨の境として置かれた関。○崇徳院 一一一九―一一六四。○浦わの風に空晴れて 崇徳院の歌「玉よする浦わの風に空晴れて光をかはす秋の夜の月」(『久安百首』四二、『千載集』二八二)。

【考察】十二番の二首も、月の歌である。そして特に名所の月を詠んだ歌である。

二首のうち左の歌は、『山家集』(三三四)に「名所月」と題する二首中の一首として見える。また『西行上人集』(二二〇)や『山家心

中集』(五七)には、「月の歌あまたよみ侍りしに」の詞書をもつ歌群の一首として出ている。右の歌は、これ以前の歌集に見えない。

左歌に詠まれた清見瀉や清見が関、右歌に詠まれた須磨の関や須磨の浦は、いずれも古く関の置かれた海辺の名所である。それぞれ月を詠んだ歌も多いが、特に清見瀉や清見が関は、その名の「清見」のイメージを月との関係に生かそうとする作が目立つようである。この左歌も、清見瀉の沖の岩に寄せる白波が月の光を受けて輝く、清らかな美しさを叙景的に描いた作である。

それに対して右歌は、月の澄む夜更けに鳴く千鳥の声に目覚めた須磨の関守がもの思いにふける様子を思いやっており、より叙情性が濃い。元来須磨の地は、文学の伝統の上で、もの悲しい思いを誘う所というイメージがある。これは『古今集』に見える在原行平の、
わくらばにとふ人あらば須磨の浦にもしほたれつつわぶとこたへよ(九六一)

の歌や、『源氏物語』須磨の巻の、
須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の関吹きこゆると言ひけん浦波、よるよるはげにいと近くきこえて、またなくあはれるものは、かかるところの秋なりけり。

などの文章が、そういうイメージの形成にかかわるところが大きかったであろう。この右歌もその伝統を受けていると思う。そして直接的には『金葉集』に見える源兼昌の歌、

淡路島かよふ千鳥のなくこゑにいく夜ねざめぬ須磨の関守(二七七)
○

により、これを本歌として詠んでいる。
定家の判詞は、まず二首の優劣がつけにくく、歌の姿の面では左歌に心が傾き、歌の心の面では右歌に引かれると言う。これは左歌については特にその表現の格調の高さに、右歌については特に思い入れの深さに、特色を認めたものであろうか。しかし定家は判詞の後半に、

崇徳院の歌を引いて勝負の判定を下している。崇徳院の歌は、

玉よする浦わの風に空晴れて光をかはず秋の夜の月(『久安百首』四二、『千載集』二八二)

で、この下句と左歌の下句が同じである点から、相対的に右勝と判定したと見られる。

十三番 左

三五 山かげにすまぬ心は何なれや(いかなれや大成)をしまれて入る月もある世に

右勝

二六 いづくとてあはれならずはなけれどもあれたる宿ぞ月はさびしき
左右、心すがたうるはしくくんだりて、いづれと申しがたけれど、あれたるやどぞ月はさびしき、といひはてたる、猶よろしく侍るかな。

【通釈】

十三番 左

二五 (世を捨てて) 山陰に住もうとしない人の心は、どういうものであろうか、——人に惜しまれて山陰に入る月もある世に。

右勝

二六 どこであらうと、月があわれに思われぬ所はないが、荒れた家では、月はことに寂しく身にしてみる。

左右ともに、歌の心も姿も整った様子に詠み下されていて、いづれがよいとも言いにくい点がありますが、(右の歌に)「あれたる宿ぞ月はさびしき」と端的に言い切っている方が、一層よいように思われる。

【注】○山かげにすまぬ心 山陰に住むことをしない人の心。この場合「山かげ」は、世捨人の住む所として言う。「すまぬ」は、「月」の縁語で「澄まぬ」をにおわしている。

【考察】十三番の二首も、月に関する歌である。そして二首は、「山陰」の庵とか「荒れたる宿」とか、人里を離れた住居にいる立場で詠

まれている点に、共通性が考えられる。

二首のうち左の歌は、『西行上人集』(一七六)に、第三句「すまぬこころの」の形で、「月」と題する歌群の一首として見える。『新古今集』(一六三三)では「題しらず」である。右の歌は、『山家集』(三四〇)に、「月歌あまたよみけるに」の詞書をもつ歌群の一首として見える。『西行上人集』(一九九)では「月」と題する歌群の一首である。

左の歌の解釈について、宣長は『新古今集美濃の家づと』に二説を示している。

かく山陰に住ても、心のすまらずして、ともすればうき世の事を思ふは、いかなることぞ。月はなべて世の人にをしまるる物なるが、それすら山に入物を、我はたれをしむ人もなき身なるに、うき世に心をかへすべきことかはとよめる也。

又上句を、世の中の人の事として、山陰はかく住よき物なるに、よの人ののがれ来てすまぬは、いかなる心ぞや。月は人にをしまわすに、すまぬを、といふ意にても有べし。

というので、山陰に住みながら俗世への未練を捨て切れないう自分の心を省みた作と見るのが前説、山陰は住みよい所なのに世をのがれて住もうとせぬ人々の心をいぶかった作と見るのが後説であろう。この二つの見方は、共に現代にも行われている。

参考までに、西行がその「山かげ」の生活を詠んだ他の歌を見ると、次の作がある。

人もこず心もちらで山かげは花を見るにもたよりありけり(『山家集』一〇三七)

これは西行自身の「山かげ」の閑居に安んじる心を詠んだ歌である。また『新古今集』でこの左歌の前に置かれた西行の歌は、

山深くさこそ心はかよふとも住まであはれを知らんものは(一六三二)

というので、これは自身の山住まいの経験に基づいて、山住まいをし

ない人を批判した歌と見られる。これらの歌にうかがわれる西行の心境と比較して、左歌を詠んだ時の西行の心境は、違っていたと考えることも可能であろうが、基本的に変わっていないと見て、ここでは宣長の二説のうち後の説によりたいと思う。すなわち、西行が世捨て人として山中に住む立場から、山に入って住もうとしない人の心をいぶかり詠嘆する内容の一首と見ておきたい。

ところで、左歌の主意は一首の上句にほぼ言われていて、下句の「をしまれて入る月もある世に」は、言い添えた形になっている。しかし、この下句によって、山陰に入る月を惜しむ者が、山陰に入って住もうとしないのは不思議だという内容も読みとれる一首になり、興趣を加えたところがあると思う。『定家十体』に「面白様」の例歌としてこの歌を引くのも、そういう点に注目したのではないか。

左歌に比べて右歌は、月を中心にとり上げて、荒れた家で見える月が殊に寂しく思われることを率直に詠んでいる。目新しさは乏しいと思うが、素直な作であろう。

定家の判詞は、右歌が作者の心を端的に伝えた点をより高く評価したようである。『新古今集』には負となった左歌を収めるが、撰者の注記はないから定家の撰歌ではない。

【備考】十三番左歌は『新古今集』(一六三三)に、右歌は第五句「月はさやけき」の形で『風雅集』(六一七)に収められている。

十四番 左

二七 月の色に心きよく(大成)をふかくそめましや宮みやを出でぬ我が身なりせば

右勝

二八 わたの原波にも月はかくれけりみやこの山をなにとひけん

両首歌、洛外之月色、海上之曉影、又しひてわきがたく侍れど、右、浪にも月はなどいへる、今すこしつよく聞え侍らむ。

【通釈】

十四番 左

二七 澄んだ月の色に、(このように)心を深く染めることができたであろうか、——もし(出家せず)都を出ないわが身であったなら。

右聯

二八 (遮るものもない)海原の、波にもやはり月は隠れてしまった、
——都にいたころ山を(月を隠すと思つて嫌つたが)どうしてあのように嫌つたのだろうか。

左右二首の歌は、左は都の外の月の色を詠み、右は海上の夜明け前の月影を詠み、これも特に優劣をつけにくいのですが、右の歌に「波にも月は」などと詠んでいるのが、比べるとやや際立って受けとられるでしょう。

【注】○月の色に心をふかくそめまじや 「ふかく」は「きよく」の形でも伝わる(『平安朝歌合大成』)。「月の色に心を」「そめ」るとは、澄んだ月の色を見て心を澄ますこと。○宮こ 都。○つよく聞え侍らむ 際立った(印象をもたらす)表現として受けとられるでしょう、といった意味に一応解しておきたい。判詞に用いられた評語「つよし」は、歌全体に対して優れている意味で用いられることもあるが、特に歌の一部の表現に対してかなり多様なニュアンスをもって用いられていると思う。細谷直樹氏『中世歌論の研究』、大島貴子氏『拉鬼体』の考察(『国語と国文学』昭和四十七年一月号)などに考察が見える。小著『定家十体の研究』(第十章、拉鬼体)でも、両氏の所説を引いた上で私見を記した。

【考察】十四番の二首も、月に関する歌である。そして二首は、都を離れた立場で月に関する思いを詠んでいる。

二首のうち左の歌は、これ以前の歌集に見えない。『新古今集』雑歌上(一五三四)には「題しらず」とされる西行の歌五首の中の一詩として見える。右の歌は、『山家集』下雑(二一〇二)に「たびの歌よみけるに」の詞書をもつ四首の中の一詩として見える。『玉葉集』秋歌下(六五八)には「月歌の中に」の詞書をもつ西行の歌二首の中の一詩として収められている。

左の歌は、「もし自分が出家して都を出ることをしなかったとすれば、澄んだ月を見て心を澄ますことはあり得なかつたであろう」との大意と見られる。西行自身の生き方を顧みての述懐の性質の濃い歌である。なお、歌の第二句は「心をふかく」「心をきよく」両様の形で伝わっている。これについて宣長は『新古今集美濃の家づと』に、次のように言う。

二の句のきよくは、一本には深くとあり。染といふには、深くの方よくなへり。清くは、染るによしなき詞也。然れ共此ほうしの歌は、すべて皆心にまかせてよみつれば、きよくにても有べし。歌の意には、清くの方まされり。

右の歌は、「遮るものもない海上でも、波に月は隠れるのに、以前都で、山が月を隠すと思つて嫌つたのは理由のないことだった」との大意であろう。海上の旅をして発見したことを歌う趣である。

定家の判詞は、右歌の「波にも月は」などの表現を相対的により高く評価して勝とする。『新古今集』には負となつた左歌を収めるが、撰者注記によると家隆一人が撰んだ歌である。

【備考】十四番左歌は『新古今集』(一五三四、第二句「心をきよく」の形が多い)に、右歌は『玉葉集』(六五八)に収められている。

十五番 左

二九 世の中のうきをもしらですむ月の影はわが身の心ちこそすれ

右聯

三〇 かくれなくもにすむ虫はみゆれども我からくもる秋の夜の月

右歌、みるべき月をわれはただ、といふふるき歌思ひ出でられて、くもる涙もあはれふかく、もにすむ虫かくれぬ月のひかりも、空清く侍れば、まさると申すべきにや。

【通釈】

十五番 左

二九 世の中の憂いことも知らずに澄む月は、(憂き世を離れて暮らす)

わたし自身のような気がする。

右勝

三〇 はっきりと藻に住む虫が見えるほど、秋の夜の月は明るい、わたしのせいで、涙に曇ってしまふ。

右の歌は、「さやかにも見ろべき月をわれはただ涙にくもる折ぞ多かる」という古い歌が思い出されて、涙で月が曇る様子もあわれ深く、藻に住む虫がはっきりと見えるほど明るい月の光も、清らかなものに思われますから、勝ると判定すべきかと考えます。

【注】〇我から 「もにすむ虫」と共に「あまの刈る藻にすむ虫の我からと音をこそななめ世をばうらみじ」(『古今集』八〇七、藤原直子)によった表現。自分ゆえの意の「我から」に、海藻の間に住む節足動物の「割殻」を響かせた語。〇みるべき月をわれはただ、といふふるき歌 中務の歌「さやかにも見ろべき月をわれはただ涙にくもる折ぞ多かる」(『中務集』一九一、『拾遺集』七八八)。

【考察】十五番の二首も、月に関する歌である。そしていずれも、月に寄せた述懐の歌である。

二首のうち左の歌は、『山家集』(四〇一)に、「寄月述懐」と題する六首中の一首として見える。『西行上人集』(一九五)には「月」と題する歌群の中に、『山家心中集』(七二)には「月の歌あまたよみ侍しに」の詞書をもつ歌群の中に見える。なお『玉葉集』(二四九四)には、第二句「うきをもしらず」の形で、「寄月述懐といふことを」の詞書で収められている。右の歌は、これ以前の歌集に見えない。

左の歌は、「世の中の憂きをもしらず」澄む月の姿に、憂き世を捨てて住む自分の姿を見いだした心を詠んだ作である。この西行の心について、安田章生氏は、

そこには澄む月に対する深い親愛の思いが流れている。句切れのない表現も、率直に思いをとおらせる点で効果をあげている。

『西行』

と言われる。しかし久保田淳氏は、

「うきをも知らず」とはいふものの、少くともわれは世の憂きを知っているはずである。知っていながら知らないそぶりをしてるのである。そのことを自省している歌なのではないか。とすれば、月のつれなさを怨ずる心もひそんでいるのではないであろうか。(『西行山家集入門』)

と言われる。

右の歌は、次の歌を本歌とすると見られる。
あまの刈る藻にすむ虫のわれからと音をこそななめ世をばうらみじ(『古今集』八〇七、藤原直子)

この本歌の言葉を生かして、自分の涙のため明るい秋の月も曇ると詠んでいる。

定家の判詞は、右歌については、同様の発想の中務の歌を引いて「あはれ深く」と評し、本歌の言葉を清澄な月の表現に生かした点と共に高く評価しているらしい。左歌については全く触れずに右歌を勝ると判定している。

【備考】十五番左歌は『玉葉集』(二四九四)に、第二句「うきをもしらず」の形で収められている。

十六番 左持

三二 憂世にはほかなかりけり秋の月ながむるままに物ぞかなしき

右

三三 すつとならばうき世をいとふしるしあらんわれみばくもれ秋の月の月 わが身は(北岡文庫蔵本等)

月はうき世のといふ歌の詞につきて心をおもへる、共にふかくみえ侍れば、持とや申すべからん。 心をおもへば(群書類従本等)

【通釈】

十六番 左持

三二 憂き世には、この外の世界はないのだ。(そう思って) 秋の月をながめていると、何とはなしに悲しくてならない。

右

三三 憂き世を捨てたというのなら、憂き世をいとうしるしがあるろう。
（月を見ると憂き世に心が留まるので、）わたしが見たら曇ってく
れ、秋の夜の月よ。

「月は憂き世の」という歌の言葉に関連して心をかえりみている
点で、（左右）共に思い入れの深い作と見られますので、持と判
定すべきかと思えます。

【注】○憂世にはほかなかりけり 憂き世にはその外の世界はない。
○すつ ここでは、世を捨てる意。○しるし 効験。○月はうき世の
といふ歌 大江為基の歌「ながむるに物思ふ事のなぐさむは月は憂き
世の外よりや行く」（『拾遺集』四三四）。『拾遺集』の詞書には「妻に
をくれて侍りけるころ、月を見侍りて」とある。○心をおもへる
（作者が自分の）心をかえりみている。群書類従本等には「心をおも
へば」とあり、その場合は、歌の心を思うと、の意と見られそうであ
る。

【考察】十六番の二首も、月に関する思いを詠んだ作である。

二首のうち左の歌は、『残集』（二二七）に「題なき歌」として見え
る。右の歌は、『西行上人集』（一九六）に、第四句「我にはくもれ」
の形で、「月」と題する歌群の中に見える。『新古今集』（一五三五）
では「題しらず」とされる西行の歌五首の中の一首として見える。

左の歌は、判詞に定家が引く大江為基の歌、

ながむるに物思ふ事のなぐさむは月は憂き世の外よりや行く（『拾
遺集』四三四）

を本歌とする。この為基の歌は、「月をながめて」と物思いが慰め
られるのは、月は憂き世の外を巡って行くためか」との意と思われる
が、西行の左歌は、その言葉を取り入れながら、「憂き世」には「外」
の世界はないので「月」を「ながむる」ままに物悲しい心になる、と
詠んだものであろう。

右の歌は、「われ見ばくもれ秋の夜の月」と詠む。その心は、次の

西行の歌に「月のすまであれな」と詠んだ心に近いのではないか。

すていにし憂き世に月のすまであれなさらば心のとまらざらま
し（『山家集』四〇五、『西行上人集』四四六では初句「すてて出
でし」）

澄んだ月を見ると、捨てた憂き世に心が留まるところから、月に曇っ
てくれと呼び掛けた作であろう。

前記の大江為基の歌が、「月」はながめて」と物思いが慰められ
る、「憂き世」を離れた存在であると詠んでいるのに対して、西行の
左右の歌は、「月」をながめると「憂き世」のことが思われてならな
いと悩む心を詠み、「月」と「憂き世」についての気持ちがいわば反
対のものになっている。これは為基の歌が妻を失って「憂き世」を痛
感する立場で詠まれたのに対して、西行の歌はすでに「憂き世」を捨
てた身でなお残る執着を自覚する立場で詠まれているための相違と見
られる。

定家の判詞は、左右の歌を共に思い入れの深い作と見て、持と判定
している。

【備考】十六番右歌は『新古今集』（一五三五）に収められている。

十七番 左

三三 秋きぬと風にいほせて口なしの色そめそむるをみなへしかな

右勝

三四 花がえに露のしら玉ぬきかけてをる袖ぬらす女郎花かな

左歌、風にいほせてくちなしのといへるも、いとよろしくは見え
侍るを、右歌のすがた心猶尤優也。仍為勝。

【通釈】

十七番 左

三三 秋が来たとき風に言わせて、自分は口をきかず、くちなし色に色を
染め始める女郎花よ。

右勝

三四 花の枝に、露の白玉を通して掛けて、折る人の袖をぬらす女郎花よ。

左の歌に、「風に言はせて口なしの」と詠んでいるのも、大層結構には思われますが、右の歌の姿や心は、やはりまことに優美です。そこで（右を）勝とします。

【注】○口なしの色 「口なし」は、「口無し」にアカネ科の常緑低木「くちなし」を懸けた表現。その「くちなし」の実で染めた色が「くちなしの色」で、濃い黄色。○をみなへし 女郎花。オミナエシ科の多年草。秋の七草の一つ。秋、分かれた枝の先に黄色の小花を多数つける。特に『古今集』のころ以後の和歌では「をみな」（女）のイメージを伴って詠まれることが多い。○花がえ 花の枝。○ぬきかけて 貫いて掛けて。

【考察】十七番の二首は、女郎花の歌である。

二首のうち左の歌は、これ以前の歌集に見えない。右の歌は、『山家集』（二八〇）に、「女郎花帯露」の題で見える。『西行上人集』（二二三）にも「女郎花帯露といふことを」として、また『山家心中集』（二〇三）には初句「花のえに」の形で、同様の詞書の下に収められている。

左の歌は、「口無し」に「くちなし」色（濃い黄色）を懸けた点に、表現技巧上の一つの趣向があるが、こういう技巧の先例は早く『古今集』の俳諧歌にみられ、

山吹の花色（はないろとも）衣ぬしやたれ問へど答へずくちなしにして（一〇一）
二、素性法師

と詠まれている。そして西行の左歌の場合は特に『金葉集』の次の歌に似たところがある。

咲きにけりくちなし色の女郎花言はねどしるし秋のけしきは（一六九、源縁法師）

この源縁法師の歌は、「くちなし色の女郎花」が口はきかないが秋の訪れを知らせていると詠んでいる点で、西行の左歌と内容が類似す

る。源縁の歌によって西行の歌が詠まれた可能性が高いと思う。ただ西行の歌の新しい点は、秋の訪れを告げるものとして「風」を加え、「秋きぬと風にいはせて」と詠んだことであろう。この「秋きぬと」「風」が告げるといふのは、『古今集』の歌、

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
（一六九、藤原敏行）

によったと思われる。そして、秋が来たとき風の音が告げられることを、「風に言はせてくちなしの」という言い方で、無言だがくちなし色で秋の訪れを女郎花が見せることに続けた点に、西行の左歌の表現技巧上の特長が認められるであろう。

右の歌は、女郎花の枝に露の置く様子を、白玉を通して掛けた様子に見立てた点に、一つの趣向があるが、こういう見立ての先例は、やはり『古今集』の次の歌などに見られる。

浅緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か（二七、僧正遍昭）
しかし露の白玉を貫く枝が、遍昭の歌では柳であるが、西行の歌では女性のイメージを伴う女郎花であるだけに、優美な印象がより濃くなるであろう。また「折る袖ぬらす」も、女性のかれんさに感じる心をおわし、一首に艶な趣を加えていると思う。

定家の判詞で、左歌の「風に言はせて口なしの」の語句を「いとよろしく」見えるとするのは、言葉の続け方の巧みさを特長として評価したものであろう。しかし定家は、右歌の全体としての「姿」「心」が優美である点を一層高く評価し、右の勝と判定している。

十八番 左

三五 山里はあはれなりやと人とはばしかのなくねをきけとこたへよ（こたへむ、大成）

右勝

三六 をぐら山ふもとをこむる夕霧（あきぎりに、大成）に立ちもらざるさをしかの声

たちもらざるさをしかのこゑ、まだきかぬたもとまで露おく心
ちし侍れば、猶まさると申すべし

【通釈】

十八番 左

三五 山里の暮らしは、あわれ深いものかと人が尋ねたら、(山里に来て)鹿の鳴く声を聞くがよいと答えなさい。(大成)

右聯

三六 小倉山の、ふもと一帯を包み隠す夕霧に、隠されずに、おのずと漏れて聞こえる雄鹿の声よ。(秋暮に大成)

(右の歌に詠まれた)霧の中から漏れて聞こえる雄鹿の声は、聞いていない私まで(もの悲しく)涙の露を誘われる思いがしますので、やはり(右が)勝ると判定しましょう。

【注】○をぐら山 小倉山。今の京都市右京区嵯峨にある山。嵯峨野の西の端に位置する。○立ちもらさるる 漏らされる。「立ち」は接頭語と考えられるが、この場合「霧」の縁語。

【考察】十八番の二首は、鹿の歌である。

二首ともに『西行上人集』に見え、左歌(二六五)右歌(二六六)と並んで「鹿」と題する四首の中に収められている。左歌は『聞書集』(九四)では第五句「きけとこたへむ」の形で、「あきのうたに」として挙げる四首の中に見える。なお右歌は『新勅撰集』(二八〇)では「題しらず」となっている。

左の歌は、山里のあわれ深さを代表するものとして秋の鹿の声をとり上げているのであるが、歌い方としては、もし人が問うならばという仮定の条件を置き、それに応じて「……と答へよ」または「……と答へむ」という形をとっている。「答へよ」と「答へむ」は両様の本文が見られる。こういう歌い方の先例としては、例えば次のような作がある。

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦にもしはたれつつわぶとこたへよ(『古今集』九六一、在原行平)

いなり山社の数を人とはばつれなき人をみつとこたへむ(『拾遺集』一一二一、平貞文)

そして西行もこの左歌以外に次の作がある。

浦島がこは何もの人とはばあけてかひあるはことこたへよ(『西行上人集』四三四)

左歌で「答へよ」「答へむ」のいずれが本来の形であったかは分らないが、いずれにしても従来あった歌い方の一つのパターンに従って詠まれた作であろう。

右の歌は、小倉山のふもとの夕霧の中から聞こえる鹿の声をとり上げて、その哀れさを伝えている。小倉山の鹿の声をとり上げて詠むことは、『万葉集』の大和の小倉山の鹿の歌にすでに見られるが、『古今集』以後の山城の小倉山の鹿の歌に引き継がれ、

夕づくよをぐらの山になく鹿の声のうちにや秋は暮るらむ(『古今集』三二二、紀貫之)

などと詠まれている。その系統の歌の中では、

をぐら山たちども見えぬ夕霧に妻まどはせる鹿ぞ鳴くなる(『後拾遺集』二九二、江待従)

に、西行の右歌は情景が近いが、右歌は説明的な言葉を用いず、一面の夕霧の中から漏れる鹿の声を印象づけるところがあると思う。

定家の判詞も、右歌のそういう特長に注目したものかと思われ、左歌については全く触れずに右歌を勝ると判定している。

なお、定家の判詞では、右歌に詠まれた小倉山のふもとの霧の中から漏れてくる鹿の声について、「まだ聞かぬたもとまで露おく心ち」がすると言っているが、これは定家が小倉山荘を所有する以前のことであったためと思われる。(定家が小倉山荘を所有した時期やその後嵯峨に親しんだ状況については、石田吉貞氏『藤原定家の研究』第一章に考証がある。)

【備考】十八番右歌は『新勅撰集』(二八〇)に収められている。

十九番

左聯

三七 しら雲を翹(たぐは)にかけて行くかりの門田の面の友(とも)したふなる

右

三八 からすばにかく玉づさの心ちしてかりなきわたる夕やみの空
鳥羽の玉章、あとなき事にはあらねど、ちかき世より人こののみよ
む事に待るべし。左歌、心詞ことにこひねがはれ侍れば、勝かつと申すに申すべし。(大成)

【通釈】

十九番 左勝

三七 白雲を翼に掛けて、空高く飛んで行く雁が、門田の上にいる友
(の雁)を慕い、鳴き交わしているようだ。

右

三八 鳥からすの羽に、墨で書いた手紙の文字のように思われて、雁が(姿も
定かでなく)鳴いて行く夕やみの空よ。

(右の歌に詠まれた)鳥の羽に書いた手紙は、(故事があり)根拠のないことではないけれど、近いころから人が好んで詠むことでしょう。左の歌は、心も言葉もとりわけ望ましい様子に思われますので、勝と判定しようと思います。

【注】○門田 かどた。家の前にある田。○からすばにかく玉づさ
黒い鳥の羽に墨で書いた手紙。『日本書紀』敏達天皇元年五月の条に見える、高麗の上表文が鳥の羽に書かれていて読めなかったのを、王辰雨みづが羽を湯気で蒸して練り絹を押し当てて写し取ったという故事による語句。「高麗たてまの上れる表あひ、鳥の羽に書けり」(『日本書紀』卷二十)

【考察】十九番の二首は、雁の歌である。

二首ともに『山家集』『西行上人集』『山家心中集』に見える。『山家集』では、左歌(四二二)は「雁声遠近」の題詞で、右歌(四二二)は「入夜聞雁」の題詞で、並んで出ている。『西行上人集』では、左歌(二五三)は「遠近に雁を聞くといふことを」として、右歌(二六一)は「雁」として出ている。『山家心中集』では、左歌(二二四)は「遠く近く雁を聞く」として、右歌(二二五)は「夜に入りて雁を聞

く」として、並んで出ている。なお、左歌は『新古今集』(五〇二)には「題しらず」として見える。また右歌は『新拾遺集』(四九九)に「入夜聞雁といへる事をよめる」として見える。

左の歌は、「雁声遠近」などの題詞の示すとおり、遠く空高く飛んで行く雁と、近く門田にいる雁とが鳴き交わす情景を詠んだ作であろう。歌だけを見るを、空高く飛ぶ雁の声を主としているようであるが、題詞から見て、門田の雁の声も言外に表したと思われる。この場合と同じ「雁声遠近」の題詞をもつ歌が『清輔集』に見えるが、

あまのはらとわたる列に具せよとや田の面のかりの声あはすらん
(一一七)

というので、これは田の面の雁が空高く飛ぶ雁に声を合わせて鳴く様子を詠み表している。なお、左歌の上句の「しら雲を翅にかけて行くかりの」という表現は、『古今集』の、

白雲に羽うちかはしとど雁のかずさへ見ゆる秋のよの月(一九一、よみ人しらず)

の上句の影響があるかもしれない。

右の歌も、「入夜聞雁」の題詞の示すとおり、夕やみの空を飛ぶ雁の声だけが聞こえて姿の定かでない、おぼつかない感じを詠んだ作であろう。その夕やみの空を飛んでいく雁の姿を「からす羽にかく玉づさの心ちして」ととらえている。これは「注」で触れたように、『日本書紀』の敏達天皇元年の条に見える、高麗の上表文が黒い鳥の羽に墨で書かれていて容易に読めなかったという故事によっている。

この故事を詠んだ和歌は、『日本紀竟宴和歌』の中にも見られる(一一一、二四)が、藤原頭季にこの故事を用いた次の作がある。

わが恋はからす羽にかく言の葉のうつきぬほどはしる人もなし
(『六条修理大夫集』一五二、『金葉集』四一一)

この頭季の歌は、人に知られない恋を詠むのに鳥羽の文字の故事を用いたものであるが、西行の右歌は、やみの空に雁の姿が定かでない様子を言うためにその故事を用い、また漢の蘇武の雁信の故事から「か

り」と「玉づさ」に縁をもたせたとと思われる。

定家の判詞は、左歌が故事に基づく表現である点を認めた上で「それが目新しいものではないことを言い、左歌の心や言葉が望ましい様子であるとして勝と判定している。

【備考】十九番左歌は『新古今集』(五〇二)に、右歌は『新拾遺集』(四九九)に収められている。

二十番 左勝

三九 秋篠やとやまの里や時雨るらんいこまのたけに雲のかかれる

右

四〇 なにとかく心をさへはつくすらん我がなげきにてくる秋かは心をさへはつくすらんなどいへる、言のはのよせありて、殊にとがなく侍れど、いこまのたけの雲をみてと山の里の時雨をおもへる心、猶をかしく聞え侍れば、左勝とや申すべからむ。

【通釈】

二十番 左勝

三九 秋篠の、山すその里では、今時雨が降っていることだろうか。生駒山に雲の掛かっているが見える。

右

四〇 (九月尽となると)なぜこんなに心も尽くして物思いをすることになるのだろうか、——わたしの嘆きで秋が暮れるわけではないに。

(右の歌に)「心をさへは尽くすらん」などと言っているのは、九月尽と言葉の上での縁があつて、特に欠点はないのですけれど、(左の歌の)生駒山に掛かる雲を見て山すその里の時雨の様子を思いやった心は、やはり興趣のあるものに思われますので、左の勝と判定すべきかと思ひます。

【注】○秋篠や「秋篠」は、今の奈良市の西北部の秋篠町のあたり。「や」は間投助詞で、場所を示すとともに詠嘆の心をこめる用法のもの。

の。○とやまの里「外山」は、高い峰や奥山・深山に対して人里に近いふもとの方の山。ここで「外山の里」と言うのは、生駒山のすそにある山里の意であろう。○いこまのたけ 生駒山。今の奈良県と大阪府の境の生駒山地の最高峰。標高六四二メートル。秋篠の西方に当たる。○なにとかく どうして、このように。○言のはのよせ 言葉の縁。

【考察】十二番は、左が時雨の歌、右が暮秋の歌である。「時雨」は、『万葉集』では、「九月のしぐれの雨に」(二一八四)、「十月しぐれにあへる」(二五九四)等の用例があり、晩秋にも初冬にも詠まれているが、平安時代の和歌では十月、初冬のものであるのが一般的になっている。その意味では二十番の左右の歌の季節は同じと言えないが、初冬は暮秋に続くので一連の季節として考えられる。

二首のうち左の歌は、『西行上人集』(六二〇)、『新古今集』冬の部(五八五)に、共に「題しらず」として出ている。右の歌は、『山家集』(三〇五)に、「人々秋歌十首よみけるに」の題詞をもつ十首の最後に出ている。『西行上人集』(二七四)には初句「なにとなく」の形であるが「秋の暮」の題で、『山家心中集』(二三八)にも「秋のくれに」として出ている。

左の歌は、生駒山に雲が掛かっているのを見て、山すその秋篠の里は今時雨が降っていることだろうと思ひやった作である。これと発想の似た先行歌が『堀河百首』に見える。時雨の題で源頭仲の詠んだ次の歌である。

神無月ゆふまの山に雲かかる麓の里やしぐれふるらむ(九〇二)
この頭仲の歌は、山に雲の掛かることからふもとの里に時雨の降ることを思っている点で、西行の左歌と似ている。ただし西行の歌は、ふもとの里を思いやる心が印象づけられる点に独自性がありそうである。それは「秋篠や」と情をこめて歌い始めていることにもよるであろうが、一つには新古今の古い注にも引かれる『伊勢物語』二十三段の生駒山の雲を詠み入れた歌の連想をもつことによると言えるかもしれない。

れない。

○ 君があたり見つつを居らむ生駒山雲なかくしそ雨は降るとも（五

この一首は『伊勢物語』では河内の女が大和の男を思つて詠んだ歌とされている。この歌が世に知られるのに従つて、生駒山は雲と結びつけられ、そのふもとの人を思う連想を伴うようになったと思われる。そういうことから西行の左歌も、生駒山のふもとの人を暮らしを思う、人懐かしい気持ちが濃く感じられるところがあるとも考えられる。

右の歌は、暮秋に心を尽くして物思いをする自身の心をかえりみて、自分の嘆きとは無関係に秋は暮れるのに、なぜこうも「心をさへは尽くすらん」といふかしんだ作であろう。この一首は解釈する際に、「心をさへは尽くす」の「さへ」が無視されていると見える場合が従来多いようだが、それでよいのであろうか。私見では、『和漢朗詠集』などにも見える「九月尽」の語が作者の念頭にあり、季節が「九月尽」になると自分の心まで「尽くす」ことになるのはなぜだろう、との作意ではないかと思う。定家の判詞に、「心をさへは尽くすらんなどいへる、言の葉のよせありて」と評するのも、その「九月尽」との言葉の縁に触れたものであろう。

定家の判詞は、右歌について、そのことを認め、特に欠点はないとした上で、左歌の生駒山の雲を見て山すその里の時雨の降る様子を思いやっつた心を評価し、左の勝としている。やはり初冬の山里に暮らす人を感じる心が自然にじみ出た点を高く評価したのではないかと思う。定家はこの歌を『新古今集』に、撰者名注記のある本によると家隆や雅経とともに選んでいる外、『定家八代抄』や『八代集秀逸』にも入れている。

【備考】二十番左歌は『新古今集』（五八五）に収められている。